Kobe University Repository : Kernel

PDF issue: 2024-06-04

商業學に就いて

上田, 貞次郎

(Citation)
經濟學商業學國民經濟雜誌,38(1):1-22

(Issue Date)
1925-01

(Resource Type)
departmental bulletin paper

(Version)
Version of Record

(URL)
https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053715

經濟學
商業學
國民經濟雜誌 第三十八卷 第一號 (大正十四年一月一日發行)

論說

商業學に就いて

上田貞次郎

一

此に商業學に關する管見を述べて同學諸兄の叱正を仰がんとするに至つた動機は全く內池廉吉博士の『改訂商業學概論』中に余の舊稿に說及ばれた部分(同書一四一五)ありしと、それに引續いて大阪高商の『商業及經濟研究』に出でたる大野辰見氏の論文(同誌第三十五卷第三十六册)並に『國民經濟雜誌』に出でたる津田武二氏の論文(同誌第三十七卷第五號)に依つて興味を喚起されたことである。內池君の『商業學概論』は明治三十九年に初

版を出して以來幾千の學生を啓發したる名著にして其功蹟は固より疑を容れざる所であるが、尙ほ今回の改訂版には同君最近の思想の轉回の方向を示されて居る故に特に面白く讀まれたのであつて、右の津田・大野兩君の批評がその點に集注したのも當然のことだと思ふ。又渡邊鐵藏博士の『商事經營論』は大正十一年末の發行であるが前記諸君の意見と對照して讀まるべきものと思ふ。

余が此問題に關して愚見を發表したのは左の如きものである。

一、同文館發行商業大辭書の中『商業學』の項（明治三十七年）

二、國民經濟雜誌明治四十年六月號所載『內池廉吉君著商業學概論を評す』

三、同誌明治四十二年七月號所載『商事經營學とは何ぞや』

四、同文館發行經濟大辭書第四卷の中『商業學』の項（明治四十五年）

其後大正二年に『株式會社經濟論』を著したが、大正十年同書改訂版を出すに際し序文中に『本書第一版執筆の頃までは商業經營學を一般經濟學より引離して獨立の一學科となすべく努力したりしも終にその事の不可能且不必要なるを感ずるに至りたり』といつた爲めに學友諸君よりその意味を質されたから十一年一月の一橋商學會に於いて之に答ふべく簡單な講演を試みたのであつた。今こ

こに述べんとする所のものは趣旨に於いて當時の講演の腹案と同一である。余が右の講演を論文にしなかつたのは入れ物ばかり考案して中味が示されないといふことは少くとも商業學の如き幼稚な學科に就いては好ましからぬと思つたからであるが、併しながら入れ物の悪いために中味の腐つてしまふ恐もあると考へなければなるまい。たゞ中味は入れ物よりも大切だといふことを忘れたくないのである。

二

日本に於いて『商業學』といふ語は明治六年に政府から發布された有名なる『學制』の中にあつたといふことが佐野商科大學長の『日本商業教育略史』（商學研究第一卷第三號）に依つて發見されたのは趣味深きことであるけれども、當時の文部省に如何なるものを商業學といふかについて一定の見識を有する人があつたのではあるまい。兎に角右の『學制』に基いて商業學校を設立したのでないから商業學も商業學校も共に空文であつたといつて宜しい。其後『商業學』といふ語が用ひられたのは明治二十九年東京高等商業學校の規則を改正した際に從來『商業要項』と稱した學

科の名稱を『商業學』と改めた時であつて、それからこの語は一般に通用するやうになつた。その『商業要項』といふ名は佐野學長の『略史』に據れば明治二十二年の同校學科表に始めて現はれたものであつて、恐らくは其以前の『商業慣習』の變形したものであらう。又現今の中等程度商業學校で『商事要項』といふ一科もここから源を發して居るのであらう。

當時の商業學は商業通論及銀行、保險、海運、鐵道、倉庫及取引所の各論より成り、學校の學科編成の上では最上級の商業實踐に連絡して居た。商業通論の內容は英書では Gambaro, Lessons in Commerce 邦書では故祖山鐘三氏の內外商業大意（三十一年發行）が代表して居り、銀行、保險等も大體に於いて之と同一の步調を取つて居た。卽ち商業通論に於いて會社組織の大要、賣買慣習、手形及小切手の實務と共に銀行、保險、運送等の取引の實務を敎へ、各論に於いて其足らざる所を詳說し、最後に商業實踐に於いて實踐的に各種取引の相互關係を知らしむる仕組であつたと思はれる。概括的にいへば實務の敍述を以つて一貫せんとしたやうに見える。併し實務を研究すれば必ず之に伴つて法律の適用に關する疑問を生じ、又實際上の慣習の發生したる經濟上の原因を考へることの必要が起つて來る。從つて實務は實

務として單獨に考へることの出來ないものであると思ふ。當時の商業學も之を深く研究すれば法律的研究と經濟的研究とに分解される外はなかつた。

我々の先輩はまづ各論の研究を進むるに當りて實務中心の商業學の殼たら脫出する必要を感じた。銀行を取扱ふものは主として英國の銀行論に走り、鐵道を取扱ふものは佛獨の鐵道論に趣き、保險を取扱ふものは保險法論に入ることゝなつた。彼等は實際の必要上から經濟法律の兩方面を研究したけれども、それは從前の如く唯混沌として混合されたのでなくして兩方面を分解して研究するやうになつた。其内でも銀行は主として經濟論に傾き、保險は主として法律論に傾くといふやうな特色を生じた。

余は明治三十七年に商業大辭書中に『商業學』の一項を擔當したときに、右の狀態を次の如くに觀察した。我商業學の現狀は恰かも萩桔梗咲亂るゝ秋の野の如く甲は乙に背き、丙は丁に添はずして、各部おのがむき〳〵の色を添へて居る。卽ち商業學の各部は全く不統一にして其本質の何れにあるかを明かにすることが出來ない。併しながら商業學は實際の必要に應じて發達するのであるから、學問上の系統を立てるよりも寧ろ内容の豐富になることが望ましい。

此に注意を要するは右の如く商業通論の各部が夫々經濟學及法律學の範圍に切込んで尨大なる發育を遂げたに拘らず、獨り本來の商業卽ち商品賣買に關する部分が長く通論の一隅にあつて僅かに賣買契約の條件中商品の品質に關するもの、引渡の時及場所に關するもの、價格に關するもの、代金支拂の方法及時期に關するもの等の分類を行ひ、且委託販賣並に委託買付の手續を說くに止まつて居たことである。石川文吾敎授は曾て『通論』と賣買とを分離せしめんとの企てを有つて居られたが、それも實現されなかつた。然るに近年內池博士は米國に於けるMarketingの研究を輸入し、更に之を整理し、增補して市場組織論を大成せんと企てられつゝある。同君の近著『市場組織論』は論文集であるが、商業を企業卽ち營利事業の意味に取らずして、財貨配給の社會的機關として取扱ふ所にその新見解を覗ふことが出來る。『改訂商業學概論』は緖言の中にその貴き新見解を示したるのみにて未だ其內容全般に亘りて之を實現したものとはいへない。余は同君が一日も早く此意味に於ける商業學の改造を完成せられんことを祈る。尙『商業學概論』には余が二十年前商業大辭書中に企業を商業學の對象とせよといへるに因りて著者の意見に反するものゝ如く記されたけれども、事實さうでないことは

後に辯明しやうと思ふのである。

三

商業學の混沌たる狀態は獨逸にても同樣であつた。一八九八年(明治三十一年)に公刊されたグスターフ・コーン教授の商業及交通論(Gustav Cohn, Das System der National ökonomie. III Bd. Handel und Verkehrswesen.)に次の如き評論がある。

世界に於ける最初の商業學は恐らく一七九二年ハンブルグ商業學校の數學教授ヨハン・ゲオルグ・ブユッシユの著書『商業の理論及實際』の一篇であらう。此書の內容は貨幣、信用、手形、商品、商品賣買、取引所問屋、商事會社、船舶、保險、海商法、破產法商業政策等、頗る廣汎なる範圍に亘りて各種の問題を五箇の部類に區別してある。當時商業に關する著書は殆ど皆無であつたから著者は主として事實上の調査を爲して其材料を蒐集したものであつて、著者の學界に對する功績顯著なることを認めなければならぬ。併しながら其學問の組織法は當時獨逸の國家學者間に行はれたカメラル學の學風を受けたること明白にして、今日より見れば決して學問の體を具へたといふことは出來ない。其後百年間にカメラル學は大に發展して

經濟學、財政學、農業經營學を分化せしめたけれども、商業學は依然としてブユッシュの舊態を襲ふものゝやうである。今日の商業學の缺點は次の如くである。

（一）商業學は經濟學、法律學、自然科學等の內より商人に必要なるだけの智識を拔き出し、學問の自然の境界を破つて別に揑造的の一範圍を劃するものである。故に商業學の各部は相互の連絡もなく、一貫の精神もない。

（二）商業學の一部は學理に技藝を配置したものである。簿記、算術、通信文の如きは理解するもの（學理）でなくして寧ろ練習するもの（技藝）である。

（三）商品學の如きは經驗に依らざれば到底養ひ得べからざる所の知識を直ちに讀書に依つて得せしめんとする企てゞある。從つて其範圍の廣くなればなる程內容は益〻皮相的になる。

（四）外國語の知識は商人のみならず何人にも必要なものである。

以上コーン氏の言は單數の Handelswissenschaft と複數の Handelswissenschaften とを混同したる嫌がある。（二）と（四）は其言の如しと雖も所謂商業通論の如きものには全然關係なきことであり、（三）は商品學を誤解してい居ないかと疑はれる。併し（一）は確かに商業學の急所を指したものであるだらう。

因みにいふ。コーン氏の引照したるブユッシュの書は Die Theoretische und practische Darstellung der Handlung in deren mannigfaltigen Geschäften. Von Johann Georg Büsch.といひ一七九二年に第一版を出したが、その第二版は東京商科大學のメンガー文庫に收められてある。勿論鐵道も汽船もない時代に書かれたものであるけれども、內容は頗る豐富にして研究の價値ありと思はれる。多くの商業通論の著者が本來の商業卽ち商品賣買の外に運送、保險、銀行等をも補助商業、機關商業等と稱して强ひて商業中に含ましめて居るのも或はその源を此書に發して居るのではないかと思はれる。ブユッシュは Hülfsgeschäfte der Handlung の一篇を設けて海運と保險を論じ、併せて簿記及破產法をも論じて居る。近時の商業學がブユッシュの舊套を脫せずといふは酷評かも知れないけれども、それが經濟學と法律學に跨りたるものであることは爭い難き所である。唯商業通論の中から經濟、法律の双方に屬する部分を切離したらばその後に固有の部分が殘るか否かの問題がある。獨逸では此點に關して學者の意見が一致しないけれども兎に角一九〇七年頃から商業經營學、私經營學、經營經濟學 Handelsbetriebslehre, Privatwirtschaftslehre, Betriebswirtswirtschaftslehre などの名を以つて獨立の一學科を起さんとするものが多く出て來た。

一九一二年中右の問題に關して生じた學者間の論爭に就いては渡邊鐵藏博士の詳細なる報告が同氏『商事經營論』の劈頭に收められてある。當時の論爭はSchär, Allgemeine Handelsbetriebslehre.(1911)を中心として爲されたもので、之に參加した人物は經濟學者の側でBrentano, Ehrenbergの兩氏であり、商業學者の側ではCalmes, Obst兩氏であつた。シエーヤは商事經營學の國民經濟學に對する關係は恰かも商法の民法に於けると同じものであるといひ、又商事經營學は國民經濟學の立場より出發して他の道を取りて進み再び之に歸着するものであるといつて居る。彼は商業經營學は商業的企業の經營を內部から研究して商人が其勤勞に對し最高の收益を得る道を明かにするのであるが、それはやがて國民經濟上に最高の經濟主義を實現する結果となると考へる。かくて彼の著書には商業の發達、分類、生產者と消費者とを連絡する機能等を說き商業者の營業方針に言及してある。結局其研究は國民經濟學の一部として既に成立せる商業論（卽ち內國商業政策）と同一趣向となり、唯從來の經濟學者が指を染めざりし問題をも取扱つただけのことになつ

四

た。それだから是は新しき學問の創設ではなくして經濟學の部分的擴張充實に過ぎずとの批評を招いたのである。余の考では内池君の市場組織論も若し之を經濟學より獨立したる意味の商業學なりと主張さるゝならば同じ批評に逢ふべきではないかと思はれる。

ブレンタノ教授の批評は頗る傾聽すべきものがある。曰く獨逸にては英佛流の抽象的經濟學が輸入せらるゝ以前に實際的なるカメラル學が發達して居たから學者は所謂經濟理論に滿足せずして現在の經濟狀態を研究した。それが所謂歷史學派の特長である。かくして獨逸の經濟學者は私經濟の研究を決して忘れて居なかつた。農業、工業、商業及交通等の政策に關する部門に於いて既に其等の企業の經營を研究して居る。然るに私經濟學者と稱する人々が之に滿足せずして別に一科學を起さんとするも畢竟從來の經濟學の諸部門の名稱を變更するに止るであらう。しかも國民經濟學以外に私經濟學が獨立するときは企業者の利益を代表する所の邪道に陷るだらう。

エーレンベルヒ氏の意見もブ氏と全く同一である。同氏は曾て Handelspolitik (1900) の中に私經濟學の必要を說いたけれども其後十年にして前說の誤れること

を悟つたと明言した。同氏に從へば農業者、工業家、商人、鑛業者、林業者等は特殊の經營學を學ぶことを必要とするけれども、是等の內容は經濟學の生產編の一部に屬すべき性質のものである。

又此論爭には關係ないけれども、リーフマン氏もその經濟學原理中に吾人は企業を研究しなければならないけれども、その爲め特に私經濟學を起す必要はないといつて居る。

余の立場は後に述べる如く此等の學者と一致し、特にエーレンベルヒ氏に共鳴するのである。

さて前記の論爭に於いて商業學者の側にあるカルメス、オブスト兩氏は經濟學者の攻擊に對し如何なる返答をしたかといふに、彼等はシエーヤの商業經營學は自分等の唱ふる私經濟學とは別物であることを以つてした。ブ氏が私經濟學は商業政策、工業政策等の名稱を改めたるに止まるといつた、あの攻擊はシエーヤに對しては當を得て居るが、新しき私經濟學に對しては攻擊にならない。私經濟學は純然たる單獨經濟の研究であつて國民經濟の一分子としての單獨經濟を取扱ふものではない。是は決して商業政策や工業政策の名を改めたものでなくして

簿記及商業學から出發するのである。而して社會全體の利益に關係なく私經濟の利益を考へるのであるけれども、此知識を經濟政策上に利用することも出來るのである。

渡邊博士はカルメス等の說明を以て滿足し、同じ見解の上に私經濟學を築かんと試みらるゝやうである。それは右の論爭の報告ともいふべき一論文のみでなく、他の論文の標題及內容からも推測し得らるゝのである。

五

併しながら余には尙ほそこに疑問がある。余の見る所では新しき私經濟學はシエーヤの商業經營學に比すれば、或意味に於いて進步したものであるだらう。何となれば商業通論の中から、商法論はいふまでもなく、經濟學特に商業政策の既に取扱つて居る部分を洗ひ流して、尙其後に殘る所のものに着眼して居るからである。けれども所謂私經濟學が單獨經濟を單獨經濟として取扱ふといふのみにては之を國民經濟學より切離すべしとの結論には到達し得ない。今の國民經濟學はブレンタノ氏のいふ如く其研究の行程に於いて同じ取扱方をするのである。

やはり一應は單獨經濟を單獨經濟として取扱ふのである。而して尙其上に單獨經濟の行爲が他のものに及す影響にまで論及するのである。例へばトラストを論ずる場合にはトラストが競爭的企業と對照して如何なる費用を節約し得るかを考へ、又トラストが如何なる價格政策を取るに依りて最大の利潤を擧ぐるかを考へるのである。而して後に尙ほ其消費者や勞働者に及す影響等を論ずるのである。Jenks, Trust Problem の如きは此の如き研究の典型的な名作であると思ふ。獨逸に多くある特殊產業の研究も亦同じ態度を取つて居る。而して其等の特殊研究を綜合したものとしてはシュモラーの原論中の企業論(余が增地庸治郎學士を煩はして譯出せしめたもの)の如き傑作がある。

かくいへばとて余は決して渡邊君等の努力を無用なりとするのではない。其理由は所謂私經濟學卽ち一層新しい名稱を以つて經營經濟學と呼ばるゝ所のものは研究の方法に於いて特色を有して居る。簿記を手段として用ひるのであつて是は普通の經濟學からは容易に入り難き所であつて、而かも實用頗る大なるものである。唯こゝに問題となるのは此私經濟學と會計學とは果して分離し得るかといふことである。獨逸では會計學を認めないから其問題は起らないが、我國

では英米と同じく會計學が認められて居るのに、尙其外に私經濟學を必要とするかといふ點を考慮すべきだと思ふ。

渡邊博士が右の論評を書かれた後に獨逸の商業學は今一度名稱を變じて居る。それは前にも出した經營經濟學である。かくの如くHandelsbetriebslehreがPrivatwirtschaftslehreになり、更にBetriebswirtschaftslehreになつたのは何の爲であるか。第一の改稱は商業に重きを置いたものが企業を目的とするに至つた爲めである。商業を財貨の配給機關といふ意味に取れば在來の內國商業政策又は米國のマーケティング卽ち內池博士の新しき商業學が出來なければならない。之に反して商法、商業會議所等の場合に於ける商の意味、卽ち營利事業又は企業の意味に取つて其營利といふ側のみを抽出すれば私經濟學が出來るのである。然らば其私經濟學を更に經營經濟學に轉じた意味は恐らく私企業にも公企業卽ち營利的ならざる單獨經濟にも共通に宛てはまる所の原則があるからであらう。現在伯林の商科大學敎授たるニクリッシュ氏は經營經濟學は高き利潤Gewinnを目的とせずして高き能率Wirtschaftlichkeitを目的とするといつて居る。同氏の著書Nicklisch, Wirtschaftliche Betriebslehre (1922)の內容を見るにOrganisation des Vermögensと稱して從來の私

經濟學と同樣の材料を收め、之と對して Organisation der Arbeit の標題の下に分業、科學的管理法、賃銀計算法等を取扱つて居る。會計學と科學的管理法とを合せて一科の學となすが如きは余の甚だ奇異に感ずる所であるけれども、商業學を營利から解放して社會的に能率高き經營の研究たらしめんとする點には共鳴せざるを得ない。その理由は內池君の新しき商業學を歡迎すると同一である。余はブレンタノ教授と同じく營利を目的とする學問があつてはならぬと信ずるものである。而して會計學も科學的管理法も社會的能率の手段として研究し得るものなることを信じて居る（會計學に就いては神戶會計學會論叢第六集所載の拙稿參照）。（科學的管理法に就いては拙著『社會改造と企業』一五頁參照）。

六

二十世紀の初頭は歐米に於ける高等商業教育勃興の時代にして、從つて又商業學の研究が一大飛躍を爲した時期であつた。前記の獨逸に於ける商業學の發達も各地商科大學の設立に伴ひたるものであつたが、英米の事情も亦同樣である。

まづ英國で最も早く商科を設けたるバーミンガム大學では經濟史學者として有名なるアシュレー教授が Business Policy なる名稱の下に講義を開始した。同氏

は一九〇八年六月のEconomic Journalに一篇の論文Enlargement of Economicsを寄せて其意見を公にして居るが、其趣意は要するに英國の經濟學があまりに抽象的であつて實際に遠ざかつて居るから具體的な經濟組織の研究を一層盛にしなければならぬ、而して之に依つてPolitical EconomyとBusiness Economyを發達せしめようといふのであつた。アシュレー教授の說は其精神に於いてブレンタノ教授の說と背馳して居ないのであるが唯英獨兩國の國情の相違せるために一は商業學の創設を批難し、一は之を主張したやうに思はれる。ブ氏のいへる如く獨逸では歷史學派の勢力大なるが故に經濟學者は經濟政策其他の名稱の下に既に私經濟的研究を盛に行つて居るから其等の研究を更に充實せしむればよいのであるが、併し英國では其方面の研究が比較的振はないからアシュレー氏の論を生じたのである。さればア氏は經濟學を擴張せよといひ、經濟學に對立したる商業學を起せとはいはぬやうである。事實に於いてア氏の講義の內容は大學の講義目錄に明かなる如く歷史學派の研究法に基きて商業及工業の經營組織を說き、之を新材料を以つて充實擴張せんとして居る。講義の要目は企業の發達、其法律上の形式、原價及市價、原價計算、景氣の循環、信用、販賣の方法、製造の規模、製造品の種類、聯合及合同、

工場の位置、賃銀計算法、勞働時間、高級使用人の分課、工業財政等にて頗る廣汎なる範圍に亙つたものである。同氏は十數年間此學科の教授及研究に勤められ、近々退職の意向ありとのことであるが、其研究の結果を著書として發表さるゝことも不可能ではあるまいと思ふ。

アシュレー教授はかくして一種の商工經營論を綜合的に計劃されたけれども、英米の學界は之に倣つたといふことは出來ない。寧ろア氏の計劃の内に含まれたる諸要目は分解されて局部的研究が實際の必要に促されて起り來つたといふのが大體の形勢である。しかもそれは英國よりも寧ろ米國についていへるのであつて、英國では私經濟を取扱ふものも直ちにそれと連續して社會的利弊を論及することになつて居る。マーシャル博士晩年の作たるIndustry and Trade (1919) 又はRobertson, Control of Industry (1923) の如きがその代表的なものである。即ち英國では私經濟的研究は一般經濟學の埒内にて行はれ、且之を經濟學中の一部門とするまでにも至らないのである。

米國に於ける局部的研究の大要はL. C. Marshall, Business Administration (1921) を通じて覗ふことが出來る。此書は米國に於いて今までになされたる各方面の私經濟

的研究を網羅せんとの試みであつて、其方法は企業の問題を數個の部類に分ち、各部に關して多くの著者の發表せる研究を成るべく原文のまゝに配列するのである。從つて玉石混淆の嫌あることは免れないけれども、之に依つて米國の諸大學が此種の問題に關し如何なる研究を爲しつゝあるかを知ることが出來る。問題の分類は左の如くである。

一、工場の位置

二、人事關係(賃銀計算法を含む)

三、販路の問題(Marketing)

四、金融の問題(會社財政及會計學を含む)

五、生產の管理(テーラー式科學的管理法を含む)

六、危險の負擔(Risk-bearing)

七、企業の形態

八、一般の問題

此等の諸問題中特に優秀なる研究と目すべきは Mead, Corporation Finance (5th edition, (1923) に始まる株式會社財政論と近時十數部の著書を出したる Marketing の

研究である。Marketingに關する著書の代表的なものはCherington, Elements of Marketing及Clark, Principles of Marketingがある。所謂科學的管理法は科學的系統を具へて居ないけれども實際上工場能率の增進に就き偉大なる功績あることは此にいふまでもない。余の觀測する所では米國にては此等の多種多樣なる研究を綜合することはまだ容易に企てられないであらう。若しなさるれば二十世紀のブユッシュを出現せしむる外はあるまいと思はれる。

七

最後に余は聊か自分の立場に就いて述ぶることを許されたい。內池博士の指摘された如く余は二十年前商業大辭書中に將來の商業學は宜しく企業の學問たるべしと論じ、其後も同じことを考へて居るのであるけれども、併しながらその企業といふ意味は商業とか工業とかの職業的機能から離れて單純なる營利の原則を抽象せんといふのではなかつた。卽ち獨逸に於いて案出されたカルメス、オブスト等の私經濟學の如きものを豫想して居たのではなかつた。寧ろ古き商業通論が本來の商業たる賣買と銀行、保險、運送等を併せて廣義の商業と稱する點に疑

を挾さみ、將來の商業學は本來の商業のみを目的とするか、又は總ての種類の營業卽ち企業を一括して研究するか、其二の道の一を選ぶことを要すとの漠然たる考へを有したのである（商業大辭書『商業』及『商業學』の項參照）。又それと共に商業學は賣買とか、貸借とか、運送とか、保管とかの個々の取引の實務 Verkehrstechnik のみを取扱ふものであつてはならぬ、企業の內部に於ける永續的なる資本及勞働の組織を取扱ふことを主たる目的とすべきであると考へた。（國民經濟雜誌所載の拙稿內池氏商業學概論第一版の批評參照）其後研究が幾分進んだ時に余は企業に就いて三種の問題があることを考へた。卽ち第一、外部關係（商業的方面）、第二、內部組織（工業的方面）、第三、資金運用（財政的方面）是である（其細目は國民經濟雜誌所載拙稿『商事經營學とは何ぞや』參照）。かくして第三の部類に屬する特殊研究として『株式會社經濟論』を出した。

然るに此等の研究を爲すに際して余は終に重要な問題に逢着した。それは私經濟上の利潤の多少を考ふるに止むべきか、又は企業者の最高の利潤を獲る爲めにする所の行爲が社會に及す所の影響をも考ふべきかといふことである。例へば前に例に取つた所のトラストの價格政策に就いて考へても、如何なる政策が最高の利潤を生ずるかといふ私經濟の問題を考へた後、直ちに其社會的影響を考ふ

べきや否や。若し社會的影響は全く切離して別に考ふるを可とするならば私經濟學は成立するけれども、此の如き考へ方を不利とするならば私經濟學は不必要といはねばならぬ。余は此の如き場合に屢々遭遇して結局私經濟學不必要說に歸したのである。

併しながら此に私經濟學を不必要とするは最も嚴格な意味に於いて國民經濟學卽ち社會經濟學と對立する所の私經濟學を不必要とするのであつて、決して私經濟的研究そのものを不必要とするのでない。私經濟的研究――更に適切にいへば單獨經濟的研究は大企業の存在する社會に於いて必要なるのみでなく、營利行爲の全然排斥されたる社會を想像して見てもやはり必要である。單獨經濟の主體が個人であつても、會社であつても、協同組合であつても、又市町村或は國家であつても費用の節約は必要缺くべからざる仕事である。エーレンベルヒのいへる如く單獨經濟的研究は經濟學の中の生產篇の一部ではあるが、頗る重要なる一部である。

余は今かくの如き立場にあつて商工經營に關する前記三種の問題を研究しつつあるが、併し之を以つて最終の立場と考へて居るのではない。切に同學諸兄の示敎を吝まれざらんことを願ふ次第である。